

# OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C	O	N	T	E	N	T	S
	勉強の仕方に関する一つの提言〔池田恒彦〕	—————	—————	—————	—————	—————	2
	高校の恩師との再会〔福田 彰〕	—————	—————	—————	—————	—————	3
	病院はワンダーランド - - 21世紀の医療環境 (12)〔牧 彰〕	—————	—————	—————	—————	—————	4
	「病院で死ぬということ」を読んで〔土師みゆき〕	—————	—————	—————	—————	—————	5
	ニューメディア情報室の新サービスほか紹介	—————	—————	—————	—————	—————	6
	他大学図書館訪問記 (16) (愛知医科大学図書館の巻)	—————	—————	—————	—————	—————	7
	書評「訓蒙窮理図解」〔浅井一視〕	—————	—————	—————	—————	—————	8
	看護図書館協議会第28回研究会に参加して〔松本玲子〕	—————	—————	—————	—————	—————	9
	本学教職員著作寄贈	—————	—————	—————	—————	—————	10
	お知らせ	—————	—————	—————	—————	—————	11
	図書館業務日誌	—————	—————	—————	—————	—————	12
	編集後記	—————	—————	—————	—————	—————	12



## 勉強の仕方に関する一つの提言

池田 恒彦



上司の立場になると、若い先生達は日頃どのような勉強の仕方をしているのだろうかと考えることがよくあります。卒前、卒後を通じて良い教育を提供することは大学の大きな使命であり、教育の充実なくして大学の発展は有り得ないと思うからです。特に医師としてスタートする研修医の2年間は非常に重要な時期であると言えます。研修医は日々の業務が非常に忙しいので、上司としては、できるだけ無駄な時間を省いて効率の良い教育環境を提供する必要があります。

私事で恐縮ですが、小生が研修医の頃は上の先生から、どんな状況であっても日に1時間は必ず本を読めと言われて、できる限り実行していたように思います（もちろんできない日も一杯ありましたが）。また、耳学問が大事なので、可能な限り先輩の話を書くようにと言われ、毎日夜遅くまで残って先輩同士の会話の中の知識を少しでも多く吸収しようとしていたように思います。耳学問はとても大事なことだと思いますが、今から考えれば、そのすべてが効率のいい勉強法だったかは多少疑問が残ります。うちの教室では関連病院の出向医も含めた教室員全員を対象に教育メールを多用していますが、これは少しでも無駄な時間を省いて、全員均等に知識を得る機会を与えるため、継続することでそれなりに効果は出てきているように思います。

近年、若い先生達がグループで勉強会をすることは一昔より少なくなっているように思います。小生が研修医1年目だった頃、毎週土曜日の朝6時（冬は真っ暗です）に医局に研修医だけ集まって、米国眼科専門医の英語の問題集を解いていたことを思い出します。今から振り返れば、勉強した細かい内容はほとんど頭に残っておらず、ただ朝早く起きて勉強したという妙な充実感と、それが終わって近辺のレストランに皆で朝食を食べに行った楽しい思い出が残っているだけです。

上記のようなことは、現代ではいわゆる『根性物語』に近い過去の遺物のように思われるかもしれませんが、今の研修医に上記のようなことを強制するつもりは毛頭ありませんし、実際良く考えてみると、昔より遥かに多くの知識が要求されるだけでなく、業務内容も多様化し、以前より格段に忙しくなっているように思います。しかし、だからと言って医療の基本をおろそかにしていいということにはなりません。大学病院で施行可能な検査でも市中病院ではできないケースは多々あります。いかに少ない手段で的確に診断できるかということも臨床医の実力の一つなのです。

また、自分の持っている知識が即座に出てくるかどうかということも大切なポイントです。例えばある医師が一つの疾患の説明を患者さんにする場合、少し本を見たら8割が説明できるのに、3割しか知識が出てこなかったとしましょう。別の医師は瞬時に5割の知識が出てきて患者さんに説明できたとすると、患者さんにとっては後者の方がハッピーなのです。もちろんあとで勉強して不足分を補うことで挽回はできますが、一回きりしか診ない患者さんでは、それで結果が決まってしまう。勉強する時は、『これをどのようにして患者さんに説明しようか』という意識を常に持っている、意外とよく記憶に残ってくれるように思います。いわゆるイメージトレーニングを習慣づけるのです。

臨床医には、もちろん知識や技量の他に、患者さんを病気から救おうと思うヒューマニズムが大切なのは言うまでもありません。しかし、これらはバランスがとれて初めていい医療ができるわけで、知識がないのでもいい医療をしようと意気込むのは、技術がないのに根性だけで試合に勝とうとしているスポーツ選手に似ています。たまにはまぐれでいい結果を出せることもありますが、長続きは絶対にしません。当たり前のことです。それよりも、知識がないのにごまかすことだけ上手くなって、それに満足してしまうことの方がもっと深刻な問題ですが・・・。

勉強の仕方は皆それぞれに違いがあるのは当然ですし、自分に一番合った勉強法を選択すればいいと思います。人から強制されてする勉強よりも、個々の判断で積極的にする勉強の方が絶対に為になると思いますし、困った局面を開く判断力を養うことにも繋がります。今一度自分自身の勉強の仕方を考え直してみましよう。

（いけだ・つねひこ 眼科学教授）

## 高校の恩師との再会

福田 彰

7月のある日、一通の葉書を受け取った。高校同窓会の案内状であった。もう、卒業して二十数年、懐かしい人達の面影が、ふと浮かんだ。私は、高校卒業後ただ一度も同窓会に参加したことがなかった。それは、懐古の気持ちがないからでも、面倒くさいからでもない。むしろ、普通以上に当時への憧憬を持っていた。しかし一方で、その頃の時代に関係するもの全てに顔を背けていたい、そんな気持ちで強く働いていたのだった。数日後、旧友のY君の懐かしい声が聞こえてきた。「これが、おそらくは皆に会える最後の機会になるかもしれないから、参加してみないか」信望厚く、友人思いの彼は、高校卒業後に消息知れずの私を案じ、住所を聞き知り、わざわざ連絡をくれたのであった。

自分には、高校時代とはどんな時代だったのか。一杯したいことがあるのにままならず、ぐるぐる同じ所から抜け出せない。不完全燃焼で憤懣やり切れないのに、毎日だけは過ぎてゆく。当時の心情は、今もってうまく言葉で表現できないが、皆が受験一色に染まっている頃、この空回り状況に陥っていた。私は、教師に対してどちらかといえば避ける方であったが、高校三年時の担任であったS先生に対しては、尊敬の念を抱いていた。しかし、悲しいかな、何かと言動を理解してもらえず、誤解されていると感じることも多かった。受験成績の期待に答えられない悔しさもあった。そんな時、S先生は一言、焦るな、と言われた。心配されたり励まされたりは有難い、しかし煩わしいから放つといて欲しい、でも孤独は寂しい。結局、卒業式にも出席しなかった私は、この時代からとにかく逃げるように故郷を出たのである。S先生には、もう会うこともないという一種の安堵感と、これでよいのかという思いを残して。

以来、二十数年間、私の心の中では高校時代は思い出したくない時代であり続けた。億劫で、ずっと逃げていたのである。自分なりの納得という後片付けが、出来ないままにいた。S先生がご健在の間に当時の心情を話し、せめてお礼を伝えたい。すっきりしない高校時代にけじめをつけたかった。その機会はこの同窓会が最後かもしれない、そう感じた時、思い切って参加を決心したのである。

同窓会当日は、快晴であった。久しぶりに訪れた故郷は、記憶に残っている町並みもあれば、全く見覚えのない建物もあった。同窓会が始まると、覚悟はしていたが見知らぬ人ばかりであった。Y君は、幹事として多忙を極めている。これじゃあの嫌な時代と一緒にじゃないか、来なければよかったかと後悔した。その後、懇親会が始まった。せめて帰る前にY君にお礼をと、彼のテーブルに行くと、そこには懐かしい高校一年当時の旧友達が集まっているではないか。その瞬間に、全てが青春の真っ只中にタイムスリップしたかの如くであった。乾杯の後、お互いの近況を話したり、当時の思い出に大笑いしたり、写真を撮りあったり。やっと寛いだ私の耳に、聞き覚えのある声が入ってきた。S先生であった。髪こそ白いものの、お元気そうであった。今度こそ少しは成長した自分を見てもらおう、そう思って考えていた言葉は、あつという間に消えていた。高校生当時のうまく表現出来ない自分が、そこにいた。たぶん私の事など、記憶の片隅にもないであろう。「久しくご無沙汰しています。」「おお、君か。あの頃は、色々あったよなあ。そうか、元気にしていたか。君に会えただけでも充分、今日来た価値があったよ。」S先生は私の事を覚えていて下さった。短い時間ではあったが、S先生と会話する間に、やっと自分なりのけじめがついた開放感が広がった。久しぶりの出会い、別れ、そして名残。心地よい夜風に故郷を後にしたが、充実した一日であった。その年に戴いたS先生の年賀状には、同窓会や高校時代の感想が書かれていた。S先生には、いつまでも健康で、この拙い生徒をこれからも説教して戴けるならば、この上もなく嬉しいのであるが。

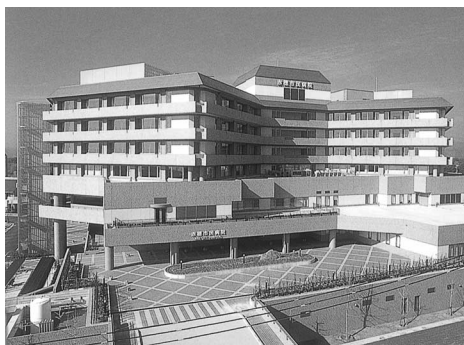
現在も、相変わらず慌しく毎日が過ぎていく。あの当時とは内容こそ違うけれど、息苦しさを感ずる時もある。そんな時には、S先生と肩を組んで撮った写真を眺め、あの日の会話を思い出しているのである。

(ふくだ・あきら 第一内科学講師)

## 病院はワンダーランド - - 21世紀の医療環境(12)- -

牧 彰

大学の建築学専攻生を対象とした[最新医療施設見学会]が、薔薇の香漂う陽春の好日に行われました。この種の[建築ウォッチング]は、大方はメディアなどを通じて広く喧伝された話題建築が通例です。それらに比べて、今回のような病院が若者たちの如何ほどの興味をそそり関心を持たれるのかと一時は危惧しましたが、思いの外多数の参加を得て、企画者としては大変嬉しく受けとめました。



[患者本位の医療]を目指す赤穂市民病院

医療と同じく、建築設計もまた人の幸せを追及する究極の[サービス業]です。「弱者をいたわる心は人だけに共通する感情であり、特に医療・司法・建築設計などの職種には不可欠である」との熱い思いから、今回の[建築(病院)ウォッチング]となりました。

本人の意志と関係なく「病院で生まれ病院で死ぬ」宿命にある私たちには、病院は[人生の縮図]であり、病院は患者と健常者(医療スタッフ)が共存する[社会の縮図]でもあります。従来日本社会は、全て身体壮健な成人男子の視点で作られてきました。社会的弱者(身障者・高齢者・幼児・妊婦・外国人など)が差別されず普通に生活できる福祉社会具現化には、この人類共通の感情[思いやり]を大切に施設や街が切に望まれます。

医療施設が建築ジャーナリズムを賑わす機会は稀ですが、病院ほど私たちの日常生活に密着している建築はありません。しかし、現代日本の医療現場はあまりにも[患者の人間性]を軽んじたお粗末窮まりないものであり、とても[共生]を理念とし[人権]を標榜する今世紀の国際基準にほど遠く、この国をこよなく愛してやまない同胞の一人としてはまさに痛憤の極みといえましょう。

たかが三文建築家の分際で市民に「病院に愛着を持ってもらう」のはいささか僭越だとしても、「地域医療に関心を持ってもらう」ことは、日本の医療を国際水準にまで高める最低限の条件だと思うのです。そんな一途な思いから、今回の[建築ウォッチング]は、建築設計を志す学生だけではなく現代医療や街創りに少なからず関心ある一般市民にも開かれた見学会として設定しました。

目下、地域の活性化を意図する[町起し]が一種のブームですが、医療・福祉施設を核とした「住民の健康が前提である」との信念から、私の所属する[I市まちづくりサロン]会員数名の参加を得ました。男性不在は残念ですが、いずれも善良にして知的好奇心旺盛な御婦人方です。

今回の[建築ウォッチング]を直に体験した彼女たちの率直な意見や感想などを記します。

「自然光や花・緑が心地よい」「病院特有の匂いが無い」「広く明るい廊下」「病室専用トイレが嬉しい」「待合椅子の工夫に納得」「病室・廊下の天井照明が優しい」「材料・配色に温もりがある」「ピアノ生演奏のあるアトリウムがよい」「用途別動線分離には感心」「看護動線の短縮に工夫がある」「引戸主体に納得」「設計者の顔が見えて施設に親しみを感じる」「絵や図書コーナーなどアメニティが豊かである」「4床の総室がよい」「個室が多い」「病室からの眺めが素晴らしい」「病院を見る目が肥えた」「今後の病院選びに参考になった」等々。

「病院がこんなに明るく楽しいとは知らなかった」「怪我や病気は望まないが、こんな病院なら入院してみたい」が共通の感想でした。しかし、「どんなにアメニティ豊かでも、できれば入院はしたくない」が正直な本音のようです。まずは健全にして妥当な意見といえるでしょう。「I市のオバタリアンたちはえらい！」が私の率直な想いです。

見学日が休日と重なり、施設利用者(患者・医療スタッフなど)の表情を十分伺い知れずいささか心残りでしたが、老若男女を問わず参加者一同は各々の設計スタッフが熱く語られた[患者本位の医療]の大切さを十分認識し、必ずや日本の医療環境向上のために少なからず貢献してくれることでしょう。時機を得て、日本の次世代を担う若い学生諸君の忌憚のない意見もこの際是非とも伺いたいものです。

(まき・あきら 元日建設計社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当)

## 「病院で死ぬということ」を読んで

土 師 みゆき

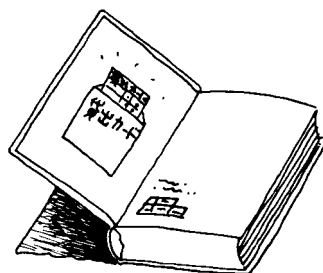
現在医療は日々発展を続けている。過去においては不治の病とされていた疾病も、今では完全でなくとも、日常生活を十分に送ることができるくらいにまで治療されている。臓器移植など新しい治療法や新しい抗生剤などが次々と開発され、また、医療の対象者である人々の健康に対する考え方も変わってきたことにより、インフォームド・コンセントが重要視されている。その為に個人のQOLを考えた看護が求められ、より高度な質の高い医療・看護を提供する必要がある。しかし、発展していく医療の中でも、治療が困難であったり、まだ治療法が見つからない疾患もある。その中で問題となるのは『告知』だと私は思う。これだけ発達した医療だからこそ、自分の病が治らないと告知されたら一体どうなるだろうか。

ここで私はどうしても紹介したい本がある。「病院で死ぬということ」という本である。私はこの本を読んで感動し、そして考えさせられた。様々な患者の臨死の場面を著して、それぞれの患者や家族の方々の心情が手に取るように感じられた。全部で11人の患者のことが書かれてあり、尊厳死をした人、最後まで闘い続けた人、辛く苦しい最期を遂げた人など、本当に様々だった。中でも私の心に残ったのは、進行胃ガンのため入院した女性の話である。入院した時は既に手術で摘出できるかわからないほど進行していた。そのため最初は家族の希望もあり病名を本人には伏せていた。しかし徐々に自分の体の異変に気づき始めて、最終的にはパニック状態にまで陥ってしまった。作者は迷った挙げ句『告知』をするのだが、告知を希望した彼女はその後1日誰とも口をきかずに過ごす。告知に反対していた彼女の息子は怒り、作者は後悔した。しかし、その後彼女が望み帰宅する時、「ありがとう」と言った。私はこの一言で作者は本当に救われたのだと思った。逆に告知をしなければ彼女の望みは果たせなかつたろうし、医療者に対して不信感を抱いたまま最期の時を迎えただろう。告知を受けた時は、なぜ隠していたのか、なぜ自分が癌なのかという心の葛藤があり、沈黙という型をとったと思う。しかし、告知を受け入れられれば自分の残りの人生を自分の思い通りに生きることができ、告知してくれたことに感謝できるのではないかと思う。それが本当に患者のQOLを考え、尊厳を保ったまま死を迎えることができるのではないだろうか。

『告知』するという事は本当に難しいと思う。患者が受け入れられれば、本人の人生を本当に全うできるという結果につながると思うが、『告知』したことが逆効果になることもあるだろう。余りのショックに自ら命を絶つという最悪の結果にもなりかねない。それだけは絶対に避けなければならない。確かに告知をしないほうがいい患者もいるかもしれない。しかし、自分のことを知らずに嘘を信じたまま最後を迎えるということは周囲の人を疑ったまま死んでいくということになるのではないだろうか。患者をよく知り、家族とも相談し状況に応じて対応することが必要となる。

私はこの本を読んで、できる限り『告知』はすべきだと考えている。医療者であればこういった選択を迫られる時があるだろう。その時どうすればいいか。今から考え続けていきたい。

(はじ・みゆき 看護専門学校 第二看護学科 1年生)



## ニューメディア情報室の新サービスほか紹介

ニューメディア情報室に新しいサービスが二点加わりましたので既存のサービスも含め紹介します。これにより、電子ジャーナルなどのレーザ方式によるカラー印刷ができるようになります。

### 主なサービス

ファイルの共有保存スペース（新サービス！）

カラー印刷（新サービス！）

スタンドアロンCD-ROMの閲覧

インターネットオンラインジャーナル閲覧

スライドフィルムへの焼付

モノクロ印刷

編集環境

以外の保存メディアについて

### ファイルの共有保存スペース（新サービス）

ニューメディア情報室では、今までフロッピーディスクやMOなどを持参しないとファイルの保存ができませんでした。普段、家庭でのPCではハードディスクに保存することもできますが、室内各PCのハードディスクは、不特定多数者がつかう一過性の用途にカスタマイズしており、利用後、電源を切ると利用前の状態にすべて自動リセットされますので、使っている間だけしか保存できませんでした。

そこで、Network Attached Storage（NAS）を設け、ファイルの保存ができるようにしました。このNASは室内LAN上でLANDISKという名称で見えます。ここに保存したファイルは、室内のほとんどのPCから操作ができます。

### カラー印刷（新サービス）

これは、ニューメディア情報室のネットワークと二階コピー室にある複合カラーコピー機とをLANDISKを経由することで実現しました。

つかい方は図のようにニューメディア情報室で印刷したいファイルをLANDISKに保存します。改めて二階コピー室のPCで保存したファイルを開き印刷を実行します。この方法はプリンタが目の届く範囲にないため、ほかの利用者と操作が重なることを回避するためです。

料金はカラーコピーと同じで成功・失敗にかかわらず1枚100円です。現金の場合はカウンタで申込んでください。ゼロックスカードも利用できます。用紙サイズはA4, B4, A3および指定のプロジェクターフィルム（詳細はお尋ね下さい）が使えます。

### スタンドアロンCD-ROMの閲覧

複数ライセンスものは2階CD-ROMコーナーや学内LANで提供していますが、こちらはスタンドアロンものを中心に閲覧できます。「今日の診療」ほか主要なタイトルが閲覧できます。

### インターネット

各種情報収集につかえるようインターネットエクスプローラが利用できます。また、オンラインジャーナルにはAcrobat Readerも利用できます。

## スライドフィルムへの焼付

PowerPointで作成したプレゼンテーションをフィルムへ焼き付けることができます。用紙設定(35mmフィルム)にさえ注意すればプリンタ同様に扱えるフィルムレコーダを設置していますので操作は簡単です。利用の際は35mmスライド用フィルムを持参下さい。

## モノクロ印刷

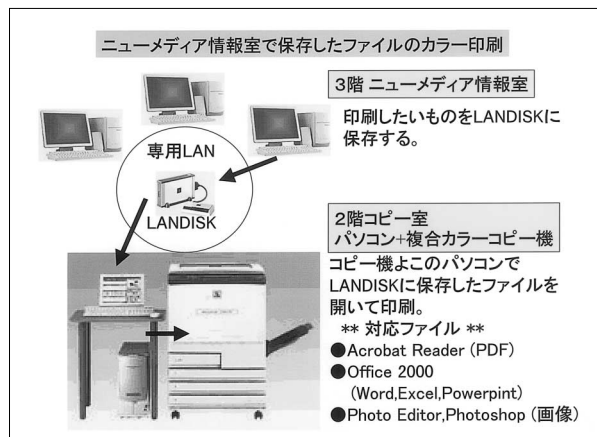
室内各PCからモノクロのレーザープリンタに印刷できます。用紙サイズはA4までとなります。

## 編集環境

室内の「編集用」と表示した機器でMicrosoft Office2000が利用できます。Word、Excel、PowerPointをセットしています。

## 以外の保存メディアについて

室内で主に利用できるリムーバブルディスクは現在のところフロッピーディスク、230MB MO、CD-ROM、CD-R/RW(読み込みのみ)、USB接続のスティックディスク(編集用2,3のみ)になります。その他インターネット環境がありますのでWebで操作できるインターネット上のディスクも利用できるようでしょう。



以上のシステム構築は筆者です。技術的なことはお気軽にお尋ね下さい。

(おおの・こうじ 和雑誌係)

## 他大学図書館訪問記 (16)

## 愛知医科大学医学情報センター(図書館)の巻



大学本館外観

愛知医科大学は名古屋市東隣り愛知県愛知郡長久手町にあり、JR名古屋駅からは名古屋市営地下鉄東山線で終点藤が丘まで、そこからスクールバスを利用し都合50分程の道程です。昭和47年の開学により愛知医科大学附属図書館は、大学管理棟3~4階に位置する形で設置されました。その後10年の間に、2階部分そして1階部分へと拡張され、開学10年を経て図書館(旧図書館)が完成したそうです。図書館の名称は昭和63年より「愛知医科大学医学情報センター(図書館)」(以下図書館と記)と改称され現在に至っています。そして、現図書館は平成11年に愛知医科大学本館建築と共に竣工されました。この大学本館には教育関係の諸部門を集中させ、1~3階に講義室が、また1階に教務部・学生部が、4階に大学事務局・役員室があり、5~6階部分を図書館が占めます。5階部分には情報処理センターおよび視聴覚教材センターも設置されています。

現在の図書館は広さ約2,300㎡、座席数230席で、その他に旧図書館を利用して約700㎡の保存用書庫を確保されています。LAN配線や電源も各席まで用意されており持込パソコンの利用の便も

計られています。図書館における電算化は全国的にも早く昭和58年度より図書受入や雑誌管理システムを始められています。当初のシステムはまだ図書館システムパッケージ等のない時代で、同館独自のシステムを日立製のホストコンピュータを利用して情報処理センターと併に開発された。平成元年からは学内LANの供用と併にOPACサービスも開始されている。現在図書館システムは平成8年度導入の日立製のシステムパッケージAtheneum（アテネアム）を経て、平成14年度よりLOOKS21/Uへと発展しています。最近のサービスの特長では、利用契約している電子ジャーナルもOPAC上で検索できるようにしたことで、冊子体雑誌とオンラインジャーナルの両方がOPAC上に現れ、電子ジャーナルならばアイコンをクリックすることでその雑誌のホームページを見ることが出来ます。

図書館の開館時間は、平日午前8時30分から午後7時30分まで、土曜日午前8時30分から午後5時までです。休館日は日曜日、祝日、年末年始です。

図書館出入口（建物5階部分）にはブックディテクションシステムが設置され手荷物の持ちこみが自由となっています。入口を入ると右手にカウンター・事務室と続き、OPACや文献検索のメニューが選べる端末があります。この階にはブラウジング・辞書等レファレンスコーナー・新着雑誌架・コピー室・AVコーナーの各サービスと、教養図書・報告書類の書架があります。この階には情報処理センターのマルチメディア教室もあり、そこでは情報学関係の実習のほか、学生の論文作成やインターネット利用等ができます。図書館でのサービスと重複しないように、サービスの分業が上手く行われているのが特長です。上の階（6階）には、グループ室が3室とコピー室があり、専門洋書・専門和書・和雑誌・洋雑誌・二次資料の各書架があります。

同館では、情報リテラシー教育にも参加しておられる。医学部の選択必修科目、看護学部の必修科目として1学年次生を対象に情報学講義が開講されており、図書館員が教員と連携し講義において文献検索法と図書館利用法を担当されている。課題を与えどう解決するかを考えさせ、その中で医中誌やMedlineのデータベースを利用する方法を修得するように計られている。

図書館のホームページは、<http://www2.aichi-med-u.ac.jp/university/japanese/menu.html> です。今後、雑誌価格の上昇への対応や、電子ジャーナルへの利用移行、古くなった資料の廃棄、開館時間の延長等の諸問題がありますが、様々な方面に積極的に取り組まれておられました。（宮本）



館内の様子（館内6階より）

## 書評

### 訓蒙 窮理図解

福澤諭吉著 慶應義塾同社 明治元年戊辰初秋

明治四年辛羊六月 再刻

浅井一視



理科教育法の講義で紹介された本の一つに、窮理図解がありこの本が我家の蔵の中にあつたことを思い出して、見つけ出した読んだのが約40年前になります。和紙に木版刷りで表紙が虫食いになっていましたが、立派な？古本でした。最近、教育改革で小学校教育の質の低下が取りざたされていますが、基礎教育を再考するためにも良いのではないかと考えて、この本を紹介します。



この本の原書は、1861年から1867年にアメリカ及びイギリスで出版された数冊の地理・博物・窮理書で、直接翻訳の体裁を改めて通俗の言葉を用いて且つ、自然現象の例をあげて図を示すのにも多くの日本の品物・事柄を引用しています。これは、『唯児女子に面白く解し易からんことを願ふものなり』と著者が述べていることからもうなずけます。小中学校の理科で学ぶ内容がほとんどで新しいことは何もないですが、著者が示すように、挿し絵が実にすばらしく、また細かなところまで実にきれいに木版刷りがなされまた、すべての漢字にるびがあるのにも感心しました。

その挿し絵の一つに腹掛けをした二人の子供が、たらいの水を水鉄砲で飛ばしているのがあります。この絵を見た子供たちは、すぐにでも竹、のこぎり、錐などで水鉄砲を作りすぐにでも遊びたくなるのではないかと思います。市販されているプラスチック製部品と作り方説明書で簡単に短時間で水鉄砲を作らせる効率ばかりを優先した今の教育からは、考えられない挿し絵だと思います。この図は、空気と圧力を説明するのに用いられており、更に井戸の水を汲むポンプの図があり、『舌』すなわち弁の働きについても述べています。その他には、易者が硝子（びいどろ）の玉「虫眼鏡」で算木筮竹（ぜいちく）の横に置いた紙を太陽光で燃やしているのを子供が見て驚いている図、サルカニ合戦の猿が囲炉裏の栗の破裂から逃れている図、その囲炉裏には、火箸が立ててあり実にリアルな感じがします。連通管の説明には、吹出し井戸と薬鐘（やくわん）等の図。かんてきに釜を乗せた日本流の蒸露罐（らんびき）の仕掛け、蝋燭（ろうそく）と廻燈籠の回転のしくみ、海風と陸風の説明に品川入船の図、華氏目盛りの寒暖計、茶碗に水銀を盛って硝子（びいどろ）の管を立てた気圧計、望遠鏡（とうめがね）顕微鏡（けんびきやう）雪の結晶、日蝕及び月蝕の図など様々な挿し絵が描かれており目を楽しませてくれます。この本は三巻十章からなっています。内容を想像していただくために以下に目録を示します。

## 第一章 温気うんきの事

萬物ばんぶつ熱ねつすれば膨張ふくむ冷れひえば収縮ちじむ有生うじやう無生むじやう温気うんきの徳とくを蒙こうむる者ものなし

## 第二章 空気くうきの事

空気くうき八世界はつせかいを擁ようして海うみの如ごとく萬物ばんぶつの内うち外そと気きの満みざる処ところなし

## 第三章 水みづの事

水みづ八方圓はつぱうえんの器けいに従したがって一様平面天然いつやうへいめんてんぜんの湧泉人工ゆうせんじんこうの水機みづけ皆此理みなこのこと

## 第四章 風かぜの事

空気くうき日に照らさるれば熱ねつして昇あり冷氣れいきこれに交代こうたいして風かぜの原もととなる

## 第五章 雲雨うんうの事

水気みづけの騰降とうかう八熱はつねつの増減ぞうげんに由り一騰一降いつとういつかう以て雲雨うんうの源もととなる

## 第六章 電雪露霜氷でんせつろそうひの事

露凝ろねいて霜しもとなり雨化あめかして雪ゆきとなる雨雪露霜うせつろそう其状異そのじやういにして其实八同じ

## 第七章 引力くわんりきの事

引力くわんりきの感かる所至細ところしさいなり又至大またしだいなり近八地上ちかひちじやうに行はれ遠く八星辰はつせいしんに及ぶ

## 第八章 昼夜じつやの事

日輪常にちりんじやうに静しずにして光明くわうめいの変へんなし世界せかい自みづから轉まびて昼夜じつやの分ぶんあり

## 第九章 四季しきの事

日輪一処にちりんいつしよに止りて温気うんきの本体ほんたいとなり世界せかいこれを廻りて四季しきの变化へんかを起す

## 第十章 日蝕月蝕にちしやくげつしやくの事

月つき八世界はつせかいを廻りて盆虚ぼんしよの変へんを生じ三体上下さんたいじやうげに重りて日月にちげつの蝕しやくを成す

(あさい・かずみ 生物学講師)

## 看護図書館協議会第28回研究会に参加して

松本玲子

福島県立医科大学附属図書館において2002年8月1日(木)・2日(金)の両日に開催された標記研究会は、『看護図書館のためのデータベース活用術』というテーマで次のとおりプログラムが進んだ。

第一日 講演 看護研究と知の体系化 看護図書館が果たす役割

福島県立医科大学看護学部長 中山洋子先生

国会図書館雑誌記事索引の作り方 よりよい検索をするために

国会図書館書誌部逐次刊行物課 大友恒文氏

第二日 医学中央雑誌の作り方 看護系の雑誌を中心にして

医学中央雑誌刊行会電子出版課 松田真美氏

JSTの看護情報への取り組み

JST(科学技術振興事業団) 福田恒雄氏・岩島真理氏

インターネットを活用しよう その1: 詳しく知ろう! PubMed

川鉄千葉病院図書室 奥出麻里氏

インターネットを活用しよう その2: もっと使える、無料サイト!

東京医科大学看護専門学校図書室 塩田純子氏

この研究会では、日頃接することのないデータベースを作る立場の方々から話を聞くことができて参考になった。

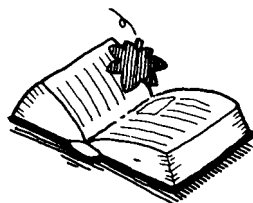
まず『雑誌記事索引』は、看護の周辺領域として欠かせない心理学や社会学などの文献検索に有効なデータベースであるが、このたびの国立国会図書館関西館の開館にあわせて、web上で公開されるようになったとの報告があった。

『医学中央雑誌』については、2002年4月から公開されたweb版(Ver. 2)をもとに説明があった。今年度より“ADVANCE MODE”が使えるようになり、さらに看護用語の使用頻度の高い98語が新設されたため、看護系の文献を探す上でもより有効なデータベースとなった。看護系文献を検索する際のヒント等も提示され、すぐに実践に役立つような話であった。

JST(科学技術振興事業団)においても、今年度よりJMEDに看護系雑誌を約200雑誌増加させ、看護図書館協議会が発行している『看護雑誌総合目録』収載の約半分の雑誌が収録対象雑誌となり、さらに今後も継続して増加させる計画が伝えられた。また、昨年度より日本看護協会会員へのサービスとして、協会のホームページ経由でこのデータベースが使えるなど、看護に関してはとても便利な状況になってきた。『医学中央雑誌』との併用により、より幅広い文献検索が可能になることだろう。

看護図書館職員のスキルアップをめざして計画された今回の研究会での経験が、今後の業務に役立つよう努力していきたいと思った。

(まつもと・れいこ 看護専門学校図書室)



## 本学教職員著作寄贈

河野 公一（衛生学・公衆衛生学）

障害からみた高齢者在宅リハビリテーションマニュアル / 河野 公一他編著 金芳堂 2002

島原 政司（口腔外科学）

在宅でも役立つ高齢者口腔ケアマニュアル / 島原 政司他編著 金芳堂 2002

勝 健一（第二内科学）

最新内科処方の実際 / 勝 健一他著 じほう 2002

竹中 洋（耳鼻咽喉科学）

鼻アレルギー診療ガイドライン / 竹中 洋他編 ライフサイエンス 2002

大槻 勝紀（第一解剖学）

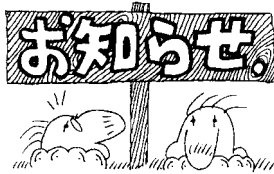
病気の形態学 / 大槻 勝紀他著 学際企画 2002

奥田 洋二（一般消化器外科学）

腹腔鏡下大腸手術の最前線 / 奥田 洋二他編著 永井書店 2002

黒岩 敏彦（脳神経外科学）

脳神経外科ハンドブック / 黒岩 敏彦監修 金芳堂 2002



### 1. 平成15年度中止タイトル

- 1) Current contents on diskette
- 2) Audiology & neuro-otology
- 3) British journal of psychiatry
- 4) Fundamental & clinical pharmacology

5) Metabolic pediatric & systematic ophthalmology

6) Protein science (さわらぎ)

### 2. Nature online サイトライセンス契約

2003年1月よりnature本誌とresearch 7誌及びreview 6誌がonlineでキャンパス内のどこからでも、何時でも利用可能となりました。これに伴い、これまで購読していた、research誌とreview誌のprint版を中止しました。

### 3. 貸出状況照会機（通称WAKARUくん）が稼働はじめました

ご自身の図書館カードのバーコードをバーコードリーダーで読み取らせるだけで、借りている資料とその返却期限日がわかります。利用時間は開館時間内、閉館10分前まで。どうぞご利用ください。

### 4. 地下書庫の利用について

先日、地下の移動式書架を作動中に書架のあいだに踏み台がはさまり、書架が大破するという事故がありました。けが人のなかったのは幸いでした。通常、書架のあいだに人や物があれば動かないようになっているのですが、今回はセンサーにかからない位置にあったようです。ご利用時には、あいだに何も無いことを確かめて作動させてくださるよう、お願いいたします。

### 5. さわらぎ分室が本館に移転統合

平成14年9月にさわらぎ分室が本館に移転統合されました。

これにより、さわらぎ分室は廃止され、本館でサービスを開始することになりました。

### 6. 図書館将来計画検討委員会が発足

図書館運営委員会の基に、図書館将来計画検討委員会が10月に発足しました。委員は、館長、教員、図書館員の計10名で構成され、図書館の将来計画について検討することになりました。

## 図書館業務日誌

- 平成14年4月
- 3日(水) 新入職員図書館見学
  - 4日(木) 医図協総務会(於、中央事務局)
  - 9日(火) 新入生図書館オリエンテーション(於、さわらぎキャンパス)
  - 12日(金) 看護専門学校新入生図書館オリエンテーション(於、大研修室)
  - 25日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
  - 26日(金) 医図協理事会・評議員会(於、東大医学部)
- 5月
- 2日(木) 新臨床医図書館オリエンテーション(於、臨床第一講堂)
  - 10日(金) 丸善CrossRef講演会に館員参加(於、新大阪シティプラザ)
  - 23日(木) - 24日(金) 日本医学図書館協会総会(於、松山市)
  - 30日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 6月
- 4日(火) 医中誌Web版説明会に館員参加(於、A.Aホール)
  - 7日(金) 医図協総務会(於、東京慈恵医科大)
  - 14日(金) 近畿地区医学図書館協議会例会(於、本学)
  - 17日(月) さわらぎ分室移転説明会(於、さわらぎキャンパス)
  - 21日(金) 医図協理事会(於、東京慈恵医科大)
  - 27日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 7月
- 3日(水) MetaLib/SFXセミナーに館員参加(於、千里ライフサイエンスセンター)
  - 4日(木) Ticerセミナーに館員参加(於、梅田スカイビル)
  - 9日(火) 高槻市立第四中学生在が図書館見学来館(10名)
  - 16日(火) 医図協企画・調査委員会(於、市大医学部)
  - 31日(水) 丸善電子ジャーナルシンポジウムに館員参加(於、つるや(株))
- 8月
- 16日(金) 他大学財務課職員図書館見学来館(6名)
  - 20日(火) 医図協総務会(於、中央事務局)
  - 22日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
  - 29日(木) 新大学院生図書館利用説明会(於、図書館)
- 9月
- 2日(月) 医学情報処理センター運営委員会(於、第3会議室)
  - 4日(水) 医学図書館研究会・継続教育コース実行委員会(於、阪大生命科学分館)
  - 17日(火) - 19日(木) さわらぎ分室の本館への移転作業
  - 20日(金) さわらぎ分室の業務終了
  - 24日(火) さわらぎ分室と本館との移転統合完了
  - 26日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 10月
- 4日(金) 医図協第74回総会組織委員会(於、大阪国際交流センター)
  - 24日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室) 第一回図書館将来計画検討委員会(於、図書館会議室)
  - 25日(金) 医図協企画・調査委員会(於、市大医学部)
  - 31日(木) 医図協分担購入検討委員会(於、中央事務局)

## 編集後記

今回のトップ記事は、池田教授に、またエッセイは福田彰先生にお願いしました。21世紀の医療環境のシリーズは12回目になります。その他多くの方に執筆して頂き、有難うございました。表紙のカットは北村達郎氏に描いて頂きました。読者の方の投稿を歓迎いたします。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.23号 2002年12月10日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (072) 683-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社